

アトリエ 琉游舎 だより 155号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

2023年6月21日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

夏至に乃東枯

- 6月21日は一年で最も昼の時間が長くなる日、二十四節気のひとつ夏至です。その初候が「乃東枯」です。「なつくさかる」と読みます。「乃東（なつかれくさ）」とは漢方薬に用いられる夏枯草（カコソウ）の古名で、シソ科の靱草（ウツボグサ）のことです。
- 夏至の頃はちょうど梅雨の時期に当たるので、暦でいうほど昼間の長さを感じることは少ないかもしれませんが。晴れていれば朝の4時過ぎから鳥の声に起こされ、夕方まで7時近くまで明るいため、1日がとっても長く感じられ、得した気分になるはずですが、大概是曇りか雨。たまに雷も鳴りとどろくので、夏至を丸1日満喫できる年はそうそうはないでしょう。
- 梅雨は雨が夏草を一層元気にし、草木がぐんぐん生長する時期です。雨上がりの晴れて気温の高くなる日は、眺めているそばから雑草もキュウリも大きくなっていきます。
- そんな時期にひとつだけ枯れている草があるとは、なんと哀れなことでしょう。花穂が黒色化して枯れたように見えるから名付けられたようで、草木が生命活動を謳歌する時季に、この草だけが枯れたように見えることから乃東枯と呼ばれるのはこの植物には本意でしょうか。
- 私たち人間は、梅雨の時期をじめじめしたどんより天気が続く、あまり快く思っていないはずですが。しかし植物にとってはいのちの雨。二、三日確認を怠ると、キュウリやサヤエンドウは食べ頃を過ぎて巨大なお化けになってしまいます。ジャガイモはいつの間にか枯れて、地中から大きな芋が顔を覗かせます。雨と湿気と気温の上昇を待ち望んでいたかのようです。
- 梅雨に雨が降らないと、干ばつとなりかつては飢饉となって飢え死にする人も出たはずですが。逆に雨が多すぎると気温が上がらず冷害や洪水を引き起こし、また重大な被害が出ます。
- 極端な天候は生き物にダメージを与えます。例年通りの穏やかな時節の推移がなによりです。そんな願いを込めて二十四節気、七十二候そして「乃東枯」の言葉もうまれたのでしょうか。「なつかれくさ」の名前にも人々の穏やかな時節の推移を願う気持ちが溢れているようです。

6・7月スケジュール

月 火 水

26	27	28	22 映画会 13時半から	23	24	25
	読書会 13時半から		29 映画会 お休み	30	7月1日	2
3	4	5	6 映画会 お休み	7	8	9 写経会 13時半から
10	11 読書会 13時半から	12	13 映画会 13時半から	14	15	16
17	18	19	20 映画会 お休み	21	22	23

読書会

6月27日

7月11日

(火) 13時半

写経会

7月9日 (火)

13時半

映画会

変則日程ですが
が開催します

移動方法が自家用車だけになってから、意識して歩かないと1日千歩も歩かないことがあります。東京で働いていた頃は地下鉄2駅くらいの移動は歩いていました。地下に入って改札を通り地下鉄に乗って、また地上に戻る手間暇を考えたら、地上を歩いた方が効率よく思われたのです。歩くに少し遠い距離は手を上げればすぐにタクシーに乗ることができる都会暮らしは、便利で選択肢が多いにもかかわらず、こと歩数に関しては、オフィス内の移動や通勤時の電車の乗り降りだけでもかなり歩いていて、万歩計を付けなくても1日1万歩は歩いていたという自覚があります。ところが公共交通空白地帯のここコリーナの地は、車がないと買い物にも出かけられない有様です。いずれ免許を返上しなければならない時が必ずやってきます。自動化運転の実用化が先か、私の免許返上が先か、どちらに転んでも大丈夫なように足腰を鍛えておかなければということに気づき「コリーナ内の移動は車を使わない、1日一万歩を歩く」を自らに課して五年が経ちました。ところが半年前の急病からの体力回復が未だ完全ではなく、最近は目標設定を1日五千歩に下方修正せざるを得ません。上り坂の途中では休み休み、かつてはいつも早歩きになり、一緒に歩く妻からもっとゆっくり歩くように注意を受けていましたが、最近はずいぶん歩くのが速くなったねと前方を進む妻に慰められています。

上り坂を意識する時が私にやってきました。この坂道はかつて何度もジョギングで駆け上がった坂道。早歩きで妻を後ろに置いてきぼりにした坂道。そして今では途中で立ち止まり呼吸を整える坂道。ある日ここが上り坂だと分かった途端、体も意識もこの坂道に順応して、今の私のあるがままの状態に即した坂道となりました。この坂道はジョギングの時も早歩きの時も立ち止まるときも、変わらず坂道であり続けていますが、私の体と意識がここが今の私にとっての「かくある坂道」と観たとき、そこが今の私の坂道になりました。坂道のあるがままが今の私にここで一息ついて呼吸を整えるように私を自ずから然らしめる（自然）のです。

仏教の宗派では自力と他力が二大派閥を作って、互いの正当性を主張し合っているように見えます。辞書的には「悟りを得るために、自分自身の素質や能力に頼る修行法を自力という。これに対し、自己を煩惱具足の凡夫とし、自力を否定し、自分以外の力、たとえば阿弥陀仏の誓願に帰依する実践を他力という。」この説明は二つを対立概念として捉えているところに、大きな誤謬があります。これは自力座禅と他力念仏と対立的に語られるように座禅という自力の修行によって悟りを得る禅宗に対して、阿弥陀仏の本願に全てを預ける念仏宗という二つの方法論に分けて語る方が、各宗派の違いを明確にできて、双方が優位性を主張しやすいがために編み出された論法です。私の結論から申し上げます。他力も自力も全く同じ力（はたらき）です。大いなるものはからい、仏の慈悲を、他力や自力と各派閥（宗派）が別々の名称を名付けただけです。お釈迦様のはからいに帰依することを互いが自力や他力と呼び習わしているだけです。仏の力（はからい）は唯一無二です。それを受け取る側がその受け取り方を自らのはからい（自我）によって語っているだけなのです。仏のはからいは私が選択するものではありません、私に注がれるものです。ですから私（我）の側から仏のはたらきを語ることはその段階で仏のはからい、つまり大いなるものの慈悲を自らが取捨選択して受け取ろうという態度です。これは仏教受持の基本、諸法無我（空、ありのまま）と正反対の振る舞いです。この誤った態度の根にある誤謬は「力」を自分（人）の持つ「力」と考えてしまったことにあります。「他力」を他からの助力をあてにすること、「自力」を自分ひとりだけの力と解釈した誤りです。親鸞聖人がいわれているように「他力とは、如来の本願力なり」つまり「力」は仏のはたらきです。その力が浄土にすむ阿弥陀仏（他）の「力」として信ずることが「他力」です。十界互具と法華経が語るように、私の中にある仏性が自ずから私の中（自）ではたらいいたその「力」を信じることが「自力」です。仏のはたらき（力）を他（阿弥陀仏）に観るか、私の中に自ずからはたらく力（仏性）に観るかの違いにしか過ぎません。

仏教用語として他力と自力の言葉を使う限り宗派の狭い教義論争から逃れることが難しいので、私はこの二つの言葉を使うことを基本的には避けてきました。どうしても二者択一の二元論の罠に陥ってしまう危険性があるからです。そこで今までは「ありのまま」という言葉や「自ずから然らしむはたらき」と表現してきました。これにふさわしい伝統仏教用語は「自然（じねん）」や「法爾（ほうに）」が恐らくそれだと思われませんが、「自然法爾」を親鸞聖人が「自己のはからいを棄てて阿弥陀の本願に全てを委ねて生きること」と定義してしまったので、浄土真宗の言葉のように思われてしまい使いづらくなってしまいました。言葉通りに受け取れば「存在や実践のあり方が、自ずからそうであるありのままのすがた」のはずです。この仏のはたらきを信じて受持することが仏教者です。そろそろ仏教は言葉の解釈や違いを語ることから脱却して、仏のありのままのはたらきを信じて、そのはたらきのままに日々を生きる道に戻る必要があると思われるのです。

日々の生活で私は仏のはたらきを自覚して過ごしているわけではありません。日々、何事もなくありのままに過ごすことができていることが仏のはたらきであると信じている私は、殊更に、日々の歩みのひとつひとつを仏のはたらきと確認する必要はないのです。ただ、いつもと違う意識が私にやってきたときに、「ああ、これが仏のはからい（自然法爾）なんだ」と、私は仏の慈悲を身に受けていることをはっきりと自覚します。それは例えば「そこが今の私の坂道なんだ」との意識が私に注がれた時です。

その時私は生きている喜びを身にまとっていることをはっきり意識できるの
 問い合わせ：0287-53-7848 08033508152
 矢板市大概2319-17コリーナ矢板C-850
 メール：toi10izuru@outlook.jp

です。それが今の私に注がれる仏のはたらきであると信じられることが、坂道で立ち止まって呼吸を整える今の私の喜びなのです。